英国の都市再生における象徴的建築プロジェクトに関する研究

A STUDY ON ICONIC ARCHITECTURE PROJECTS FOR URBAN REGENERATION IN THE UK

安齊真吾*
Shingo ANZAI

Culture has become considered as a crucial element in urban regeneration in the UK. This study focuses on new iconic architecture in England and aims to clarify its importance, practices, and challenges. It argues that 1) iconic architecture is expected to deliver vibrant local economy as well as pride and confidence to local people; 2) the British Government has exploited the National Lottery Funds to underpin iconic projects, which have become new essential landmarks for localities; 3) some unsuccessful projects reveal importance of adequate business plans, location and concepts for the projects, based on local needs.

Keywords : Culture-Led Urban Regeneration, Iconic Architecture, Public Buildings, National Lottery Funds, England

文化先導型都市再生, 象徴的建築, 公共建築, 英国宝くじ基金, イングランド

1. はじめに

1-1 背景と目的

英国では産業構造の転換により衰退した都市に再び活気をもたらすために、一定の地区に集中的に資本を投じる都市再生事業が、1970 年ごろから国策として実施されてきた。その中で 1990 年代後半以降は、文化を都市再生の核とし、特に卓越したデザインの建築により地域のイメージを一新する手法が多く取り入れられ、象徴的 (iconic) な公共建築が数多くの都市に姿を現した^{注1)}。

その背景のひとつには、欧州における都市間競争の激化がある。都市の競争力強化は EU においても重要な施策であり^{注2)}、企業の誘致や投資、観光を促進するためには、都市の魅力を向上させ世界にアピールする必要があった。加えて、都市における創造性や革新性が注目される中で^{注3)}、文化が都市における経済成長の原動力となるという考え方が普及し、文化先導型都市再生を都市政策・戦略の中核に据える都市は急増した^{注4)}。

他方、象徴的建築の出現は、英国において第二次世界大戦後暫くの間続いた、均質で機能主義的な建築の増加や、画一的な都市空間形成の進行に対する反動であるとする指摘もある^{注5)}。また、文化が社会的排除 (social exclusion) などの社会問題の解決に寄与することも期待され、都市再生の「万能薬」とみられる傾向もある^{注6)}。

我が国の都市再生戦略において、文化は少なくともその中心ではないと考えられる^{注7)}が、欧州と同様、アジアにおいても国際的な都市間競争が激しさを増す中で、都市の魅力をアピールするとともに都市空間の質的な充実を図るためにも、都市再生の中核に文化を位

置づけることは意義があると考えられる。ただしその際、英国における象徴的建築プロジェクトにおいて失敗事例が散見されることから、都市再生における文化の意義や役割の明確化と課題の把握が重要であると考えられる。

本研究では英国を対象に、文化先導型都市再生、特に象徴的建築の整備プロジェクトに着目し、それらの意義を整理した上で、英国政府による政策及びイングランドにおいて実施されたプロジェクトの現状について、その特徴と効果を把握するとともに、象徴的建築プロジェクトの課題について明らかにすることを目的とする。

1-2 既往研究

1990 年代以降の英国の都市再生については、まちづくりのガバナンス⁸⁾や大学との連携⁹⁾、建築保存¹⁰⁾、環境の創造・再生¹¹⁾等の視点で触れられてきている。英国の都市再生制度自体を主題として取り上げた研究としては、村木¹²⁾が RDA による都市再生の広域的枠組みについて分析している。また、安齊¹³⁾は労働党政権下の総合的な社会政策としての都市再生について論じている。本研究は、前労働党政権下の都市政策のもう一つの特徴である文化、特に建築に焦点を当てた都市再生施策に関する研究報告である。

1-3 研究の方法

本研究においては、「文化先導型都市再生」を、文化的な事業が触媒又は原動力となり都市の再生を図るもの^{注8)}と定義する。この概念には、オリンピック等のスポーツや、欧州文化首都のようなイベントも含まれるが、本研究では、都市空間により直接的かつ持続的に影響を与えるものとして、地域のランドマークとなる意匠性の高

* 国土交通省 工修・理修

Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism, M. Eng., MSc

い建築（以下「象徴的建築」とする。）に焦点を当てる。

はじめに、文化先導型都市再生及び象徴的建築の意義について、英国における研究及び政策文書をもとに整理する（2章）。次に、英国政府が展開した文化先導型都市再生に係る戦略・支援策等について整理し、具体の象徴的建築の整備プロジェクトを概観してその特徴を分析する（3章）。その上でケーススタディを抽出し、プロジェクトの企画・設計プロセス等実現に至った経緯を把握するとともに、その成果について捕捉する。その際、地域住民に与えた影響についてはアンケート調査により把握する（4章）。さらに、経営破綻等により失敗したプロジェクトについて、その要因を整理することにより象徴的建築プロジェクトの課題を把握する（5章）。最後に、以上の分析を踏まえ、文化先導型都市再生における象徴的建築の意義と、現状及び課題について考察する（6章）。

2. 文化先導型都市再生と象徴的建築の意義

2-1 創造性

文化先導型都市再生の普及の背景に、都市における創造性に関する論考がある。Florida³⁾は、都市の経済成長及び都市再生の成功のためには、企業の集中よりも創造的な人々の集中を促進することが重要であり、そのため優遇税制やインフラ整備よりも、創造的環境を生み出す「場所の質」が重要であると指摘している。また、Hall¹⁵⁾は創造的環境（creative milieu）、Landry⁴⁾は創造的都市の重要性を論じている。文化は創造性を生み出すものであり、特に象徴的建築は、場所の質の高さを表すとともに、創造的な人々が帰属意識をもつようなシンボルとなると Miles^{註9)}は指摘している。

2-2 文化先導型都市再生の意義

（1）地域経済

文化は都市経済の主要な要素の一つであり、文化先導型都市再生は文化産業の発展等に伴う経済活性化をもたらす^{註10)}。文化先導型都市再生は、創造的な人々を引きつけ、これが文化産業や創造産業を活性化することが期待される。実際、かつて工業で繁栄したものの、その後の衰退により活気を喪失した都市において、新たな活力と雇用を創出するための手段として、文化産業に着目する事例が欧州各地で多く見られるようになった。英国において創造産業は成長を遂げており^{註11)}、文化先導型都市再生により、地域経済の成長、さらには国際競争力の強化につながると期待される。

（2）地域社会・文化

文化が経済成長の手段として捉えられる一方で、「経済的視点からの文化先導型都市再生は、文化の多様な意義や文化そのものの価値を見落としかねない」との指摘もある^{註12)}。このような観点から、文化先導型都市再生のもう一つの意義として、既存の場所のアイデンティティを再生・強化し、新しい文化的な価値・多様性を創出することが期待される。

また、貧富の差に関係なく高い文化に触れることが可能な環境の創造や、異なる社会集団・個性等、多様性の受容促進により、社会的排除の問題も緩和するとの見方もあるが^{註13)}、一方で高級市街地化（gentrification）の問題も指摘されており、社会的意義に関しては相反する見方がある^{註14)}。

2-3 象徴的建築の意義・役割

（1）地域経済

象徴的建築は、いわば広告塔となり、都市のイメージ・アップやブランド力向上に貢献し、投資や観光を呼び込み地域経済の再生を図ることが可能となるため、都市の経済的発展に欠かせない要素と認識されている^{註15)}。英国文化・メディア・スポーツ省（以下 DCMS: Department for Culture, Media and Sport）は、「都市の経済活力向上のため、文化施設その他の象徴的建築の保存・活用や創造は、必要不可欠な要素である」としている^{註16)}。

（2）地域社会・文化

象徴的建築は、その魅力ある空間形成により、地域のアイデンティティの再生や住民のプライド・自信の強化にも重要な役割を果たす。DCMS は、象徴的建築がランドスケープ、地域の文化、場所の感覚に重要な影響を与えるものであることを指摘している^{註17)}。

2-4 小括

以上のように、文化先導型都市再生と象徴的建築は、経済再生及び地域社会・文化自体の強化の双方に寄与することが期待されており、それは英国政府の文書からも明確に読み取ることができる。

3. 政策とプロジェクト

3-1 英国の文化先導型都市再生政策

（1）国家戦略

文化先導型都市再生を推進するための国家戦略として、1997年のブレア政権による、「クール・ブリタニア」と称する国家の再ブランド化が挙げられる^{註18)}。1998年には、副総理が建築家 Rogers を座長とした諮問機関「アーバン・タスク・フォース」^{註19)}を招集し、1999年の報告²²⁾の中では、「都市の再生にはデザインの向上が不可欠である」等、都市再生における文化やデザインの重要性について指摘された。また、DCMS は、「都市再生の中心にある文化」²⁰⁾を発表し、文化先導型都市再生の必要性を述べている。

（2）財政支援

DCMS は、文化先導型都市再生を進める際に、財政面において英国宝くじ基金（National Lottery Fund）が大きな役割を果たしていることを指摘している^{註20)}。実際に、英国における政策文書や学術研究に例示又は事例として取り上げられている象徴的建築プロジェクトをみると（表1）、ほぼ全てのプロジェクトが、ミレニアム委員会（The Millennium Commission）^{註21)}又はアーツ・カウンシル

表1 例示される象徴的建築プロジェクト

建物	所在地	年	A	B	C	D	E	主な基金
テート・モダン	ロンドン	2000	○	○	○		○	ミレニアム委員会
ザ・ラウリー	ソルフォード	2000	○	○	○	○	○	ミレニアム委員会 アーツ・カウンシル
バルティック	ゲーツヘッド	2002	○	○	○	○	○	アーツ・カウンシル
セージ	ゲーツヘッド	2004			○	○		アーツ・カウンシル
エデン・プロジェクト	セントオスデル	2001		○				ミレニアム委員会
テート・リバプール	リバプール	1988				○		—
アービス	マンチェスター	2002					○	ミレニアム委員会
ファクト・センター	リバプール	2003					○	アーツ・カウンシル

A: 英国または世界の文化的アイコンとなり、地域再生の触媒として作用した個性的な建物【文献20）p.7】
B: 象徴的建物が経済に貢献するとともに、地域の物理的、社会的、文化的再生に寄与し、新規投資を誘致し、雇用と地元住民への機会を創出することを示した新しいランドマーク建築物【文献20）p.11】
C: 場所の外部的な知覚を変えた先進的な事例【文献6）p.894】
D: 外部的なイメージ及びランドスケープを支配する新しい文化的象徴【文献14）p.10】
E: 英国の都市の中で最も議論を呼んだ近年新しく建てられた建物であり、革新的な建築デザインや文化の普及拡大に対する賞賛を受けたのみならず、経済効果が大きな話題となったもの【文献23）p.306】

(Arts Council) の資金提供を受けたものであることがわかる。

これらは双方とも宝くじ基金を分配する役割を担っている組織である。宝くじ基金は 1994 年から制度化されており (DCMS 所管)、売り上げの 28%が、芸術等の分野 (good causes) に使用される^{注 22)}。

ミレニアム委員会は、ミレニアムを祝福するにふさわしい文化活動を支援する目的で設立されたものであり、数多くの都市再生に貢献する象徴的建築プロジェクトに対して資金を提供した。また、アーツ・カウンシルは、芸術の普及を主目的とした団体であるが、宝くじ基金を文化資本プロジェクトに対し集中的に分配している。

(3) 技術支援

象徴的建築をデザイン面でサポートしてきたのが、1999 年に設立された建築・都市環境委員会 (CABE: Commission for Architecture and the Built Environment) である。CABE は建築物のデザインを審議するデザインレビューを行っており、2011 年の 3 月にデザイン・カウンシルに統合されるまでの間、400 もの大型建築物を審査し、建築デザインに多大な影響を及ぼした。DCMS は、CABE が文化先導型都市再生を推進した一要素であるとしている^{注 23)}。

3-2 象徴的建築プロジェクト

イングランドにおける主要な象徴的建築プロジェクトを把握するにあたり、①DCMS が宝くじ基金の果たした役割を特筆している点、②表 1 により象徴的建築として挙げられた事例がほぼ全てミレニアム委員会又はアーツ・カウンシルの助成を受けている点、③両団体の助成目的が象徴的建築を指向していると思われる点^{注 24)}を考慮し、本研究においては、宝くじ基金を財源として建てられた大規模建築を象徴的建築と捉える。具体的には、両団体のいずれかが助成した、総事業費が 1,000 万ポンド以上の新築又はコンバージョンのプロジェクトとする。その結果、45 件のプロジェクトが抽出された (表 2)。

(1) 事業費

総事業費ではミレニアム・ドームが 6 億ポンドを超えて突出しているほか、1 億ポンドを超えるプロジェクトが計 6 件ある。これら 45 プロジェクトの合計は約 26 億ポンドにのぼる。

(2) 地域分布及び立地条件

地域的な分布を図 1 に示す。イングランド全域に分布しているが、都市圏^{注 25)}別ではグレーター・ロンドンが 14 件 (31%)、次いでタ

表 2 イングランドの象徴的建築プロジェクト

都市	プロジェクト名	種別	年	コスト	基金
(1) ロンドン	Sadler's Wells Theatre	劇場	1998	■	A
	BFI Imax	映画館	1999	■	A
	ミレニアム・ドーム	博覧会場	2000	※	M
	テート・モダン	美術館	2000	■■■■■	M
	Millennium Bridge, Bankside	橋	2000	■	M
	Soho Theatre	劇場	2000		A
	Mill End Park	公園	2001	■	M
	オーシャン	劇場	2001	■	A
	Golden Jubilee Bridges	橋	2002	■■	M
	Laban Centre for Movement and Dance	コミュニティセンター	2003	■	A
	Hampstead Theatre	劇場	2003		A
	Unicorn Theatre	劇場	2005		A
	Rich Mix Centre	コミュニティセンター	2006	■	M
	Bernie Grant Arts Centre	アートセンター	2007		M
(2) バーミンガム	Millennium Point	科学センター	2001	■■■■■	M
	ザ・パブリック	アートセンター	2008	■■	A
	ウオールソール	美術館	2000	■	A
(3) マンチェスター	New Art Gallery Walsall	美術館	2000	■	M
	Manchester Millennium Quarter	複合開発	2002	■■	A
(4) リーズ	ザ・ラウリー	アートセンター	2000	■■■■■	A/M
	Leeds Millennium Square	その他	2001		M
(5) ニューカッスル	International Centre for Life	科学センター	2000	■■■	M
	Gateshead Millennium Bridge	橋	2001	■	M
	バルティック	美術館	2002	■■	A
	セージ	音楽ホール	2004	■■■	A
(6) ノッティンガム	Nottingham Contemporary	アートセンター	2009		A
(7) シェフィールド	英国ボビュラー音楽センター (NCPM)	博物館	1999		A
	Sheffield - Remaking the Heart of the City	複合開発	2002	■■	M
	ロザラム	科学センター	2001	■■	M
(8) ブリストル	At-Bristol	科学センター	2000	■■■■■	M
(9) ポーツマス	The Renaissance of Portsmouth Harbour	博物館	2005	■■■■	M
(10) レスター	National Space Centre	博物館	2001	■■■■	M
	Belgrave Baheno Peepul Centre	コミュニティセンター	2005		M
	The Curve Theatre	劇場	2008	■■■	A
(11) コベントリー	The Phoenix Initiative	複合開発	2003	■	M
(12) ハル	The Deep	博物館	2002	■■	M
(13) ノーリッジ	The Forum	コミュニティセンター	2001	■■■	M
(14) サンダーランド	National Glass Centre	博物館	1998		A
(15) ミルトンキーンズ	Milton Keynes Theatre and Art Gallery	劇場	1999	■	A
(16) ピーターバラ	Peterborough Millennium Green Wheel	その他	2001		M
(17) ドンカスター	アース・センター	テーマパーク	2001	■■■	M
(18) ウィンチェスター	INTECH Science Centre & Planetarium	科学センター	2002		M
(19) ダラム	Durham Millennium City	複合開発	2002	■	M
(20) セントオスヘル	The Eden Project	その他	2001	■■■■■	M
(21) ホワイトヘブン	The Renaissance of Whitehaven	その他	2001		M
(22) アシュビーデラザウチ	Conkers	博物館	2001		M

注) ミレニアム委員会及びアーツ・カウンシルの資料に基づき作成。プロジェクト名が日本語表記のものは、本研究で事例として扱うもの。【都市】都市圏人口順。(1) グレーター・ロンドン、(2) ウェストミッドランズ、(3) グレーター・マンチェスター、(5) タインサイド、(7) シェフィールド。【年】施設が開館した年。【コスト】プロジェクトの総額。無印: 2,000 万ポンド未満、■: 4,000 万ポンド未満、■■: 6,000 万ポンド未満、■■■: 8,000 万ポンド未満、■■■■: 1 億ポンド未満、■■■■■: 1 億ポンド以上、※: 6 億ポンド以上。【基金】A: アーツカウンシル、M: ミレニアム委員会。

図 1 象徴的建築プロジェクトの分布

表 3 象徴的建築プロジェクトの立地条件別件数

都市圏	2km圏	4km圏	8km圏	8km圏外	計
ロンドン	3 (21%)	4 (29%)	4 (29%)	3 (21%)	14 (100%)
人口 50 万人以上	11 (73%)	1 (7%)	1 (7%)	2 (13%)	15 (100%)
人口 50 万人未満	11 (69%)	2 (13%)	2 (13%)	1 (6%)	16 (100%)
計	25 (56%)	7 (16%)	7 (16%)	6 (13%)	45 (100%)

注) 表 2 における (9) ポーツマス以下が人口 50 万人未満に該当

表4 象徴的建築プロジェクトの事例

	テート・モダン	バルティック	セージ	ザ・ラウリー
用途	美術館	美術館	音楽ホール	アートセンター
都市(立地)	ロンドン(2km圏内)	ゲーツヘッド(2km圏内)	ゲーツヘッド(2km圏内)	ソルフォード(4km圏内)
経緯等	1992年、世界の現代アートを展示するため、テートは第2の美術館計画を発表した。新築とコンバージョンの両方を視野に建設場所の選定を進めた結果、1994年、旧バンクサイド発電所(1982年閉鎖)の建物をコンバージョンする計画に決定。対岸のシティと結ぶ橋を計画することも決定した。	1996年、北東イングランド地方においてアートに投資する「The Case for Capital」戦略で、現代ビジュアルアートセンターを設ける構想が打ち出された。ゲーツヘッド市は旧製粉所(1950年建設、1982年閉鎖)への誘致を展開し、成功した。その条件は、付近に橋を設けることだった。	地元のオーケストラが、世界トップクラスの音楽家を呼び、ハイレベルな演奏で観客増加を目指し、良好な音楽ホールの整備を求めている。ゲーツヘッド市は音楽センターが当該地区の文化地区構想に合致していると捉えてこれを誘致し、1997年に立地が決定した。1998年前半の半年で事業推進体制を整えた。	1988年、ドックランド地区(1982年閉鎖)を文化のまちづくりにより再生する試みの中で、アートセンター建設が提案される。幅広い分野のアートを市民が楽しみ、創造性を高め、多様な機会を創出することを目指す。地元コミュニティに根ざしつつも、国際的に名高いランドマークとすることがコンセプト。
建築家	Herzog & de Meuron【コンペ】	Ellis Williams Architects【コンペ】	Foster & Partners	Stirling & Wilford
設計の特徴	煙突を残したり、建物内に大きな吹き抜けを残して巨大な展示空間を確保したりするなど、発電所の建物のもつ特徴を最大限残している。随所にテムズ川を望むスペースを設けた。	南北のファサードをオリジナルのまま残した。ミレニアム・ブリッジと空間的につなげるためのエントランス空間を増築。エントランス周辺は住民が気軽に立ち寄りやすい空間にしている。	世界トップクラスの音響を確保するための工夫が天井等に施されている。3つのホールのステージのフロアレベルを合わせるなど、搬入のしやすさ等サービス動線にも配慮。	造船で栄えた地域の歴史を意識し船をモチーフとした建物。建物内外にプロムナードを設置し、ガラスの外壁面を介して内外のアクティビティを結びつけ、住民が立ち寄りやすいよう配慮。
来訪者数	年間470万人(当初予測は180万人)	年間64万人(当初予測は35万人)	年間75万人(当初予測は65万人)	年間80万人(ギャラリーは年間55万人:移転前の5倍)
経済効果	年間7,500万～1億4,000万ポンド	—	4,300万ポンド(初年度)	帝国戦争博物館北館、BBCメディアシティが相次いで立地
雇用効果	2000～4000人	—	950人超	—

図2 象徴的建築プロジェクトの事例（位置関係）

インサイド（ニューカッスル及びゲーツヘッド）が4件である。都市圏を人口規模により3分類とした上で、プロジェクト件数を都市圏内での立地条件(各都市圏の中心^{注26)}からの距離に応じて4分類)ごとに示したのが表3である。ロンドンでは、中心から離れた場所のプロジェクトが多い(半数が4km圏外)が、これは都市圏の広がり大きさを反映していると考えられる。一方、ロンドン以外の都市では、プロジェクトの8割が中心から4km圏内で実施されている。

(3) 用途

建築物の用途別では、劇場(7件)、博物館(6件)、科学センター(5件)が多い。全て公共建築もしくは公共性の高い建築である。

3-3 小括

文化先導型都市再生の、経済及び地域社会・文化への効果に対する期待を背景に、英国政府は宝くじ基金による助成とCABEというデザインの支援体制を構築することなどにより、象徴的建築の整備を促進してきた。イングランドにおいて、事業費1,000億ポンド以上の象徴的建築のプロジェクトはおおよそ10年間で45件、26億ポンドに及び、公共性の高い建築を中心に、ロンドンをはじめイングランド全域に展開していることが明らかになった。

4. 象徴的建築の企画・設計プロセスと効果

象徴的建築の企画・設計プロセスや効果を把握するにあたって、可能な限り英国において典型的な事例として認識されている事業を抽出する。ここでは前掲の表1を活用し、複数回以上言及のある事

業と定めた結果、テート・モダン、バルティック及びセージ、ザ・ラウリーが抽出された(表4)。これらはいずれも河川又は運河沿いに展開したプロジェクトであり、歩行者用の橋で対岸が結ばれたという共通点がみられる(図2)。

4-1 企画・設計プロセス

企画の発端として、テート・モダンは現代アートの所蔵作品の展示場所の確保を、セージは地元オーケストラのためのコンサートホールの確保を検討しており、またバルティックは現代アートの拠点をつくる構想があった。これらはいずれの場合も、企画や中身、機能が先にあり、建設地は後から選定された。一方で、ザ・ラウリーはソルフォードのドックランド地区を再生するべくマスタープランを検討していく中で、象徴的な文化施設が企画されており、都市再生に主眼が置かれたプロジェクトであった。

設計者の選定方法は、テート・モダンとバルティックがコンペであった。一方、ザ・ラウリーとセージでは、地元と対話しながら設計が進められた。ザ・ラウリーは、運河の歴史を踏まえて船のイメージで建物のデザインがなされるとともに、より市民に親しまれやすい空間形成を念頭に設計されている。またセージは、音響の質に重点をおきつつ、3つのホールを柔らかな曲線屋根でつなぐ設計とし、地域のランドマークとなることを意識している。

4-2 効果

(1) 地域経済

高い経済効果を生み出すための重要な要素に、施設への入場者数がある。テート・モダンが世界屈指の入場者数を獲得したほか、セ

表 5 ザ・ラウリーの効果（地域社会）

設問	全体(肯定者の割合)		居住者と来訪者の違い		
	平均	信頼区間 (95%)	居住者 (平均)	来訪者 (平均)	X ²
ザ・ラウリーは地域のアイデンティティに 合った建築デザインと思うか	77%	60～94%	87%	64%	1.9
ザ・ラウリーが好きか	88%	75～100%	93%	82%	0.82
ザ・ラウリーは地域のイメージを良くしたか	92%	81～100%	93%	91%	0.05
ザ・ラウリーは地域に欠かせないシンボルか	77%	60～94%	93%	55%	◎5.38

◎:有意差あり(有意水準5%)

写真 1 ザ・ラウリー

ージ、バルティックとも予想を上回る入場者数である。

経済効果が算出されているものでは、テート・モダンが1億ポンド前後、セージが4,300万ポンドとされている^{注27)}。ザ・ラウリーにおいては金額が明示されていないが、対岸の帝国戦争博物館北館（2004年開館）や、BBCメディアシティの誘致に多大な影響を与えたと評価されている^{注28)}。

（2）地域社会・文化

経済効果に比べ、地域社会・文化への影響は定量的把握が容易ではないが、本研究ではアンケート調査により、居住者及び来訪者の意識からこれを捉える。ここではザ・ラウリー（写真1）のみを事例とする^{注29)}。ザ・ラウリーは2つの劇場と地元出身の画家ラウリーのギャラリー等からなるアートセンターである。調査の方法は、ザ・ラウリー周辺で質問票を配布し、郵送による返答とした。2009年7月26日に実施し、配布数は40、有効回答は26（うち居住者15、来訪者11）、有効回答率は65%であった^{注30)}。結果の概要を表5に示す。

<地域への調和>

「ザ・ラウリーは地域のアイデンティティに合った建築デザインと思うか」という質問に対し、77%が肯定（「そう思う」又は「とてもそう思う」と回答。以下同じ。）しており、地域への調和という観点からはデザインは概ね成功していると捉えられる。

<主観的評価>

次に、主観的な評価として、「ザ・ラウリーが好きか」という質問に対して88%が肯定しており、地域の中でこの施設が親しまれていることが伺える。

<新しいアイデンティティ>

最後に、施設の地域へのインパクトを捉えるため、ザ・ラウリーが地域の新たなアイデンティティとなったか否かについて把握した。「ザ・ラウリーは地域のイメージを良くしたか」という質問に対して92%が肯定し、95%の信頼区間においても81%以上であり、地域内外ともにイメージ向上に大いに寄与していることがわかる。一方、「ザ・ラウリーは地域に欠かせないシンボルか」には77%が肯定しているが、来訪者と居住者の認識に5%の有意水準で有意差が見られ、居住者の方が来訪者よりも、ザ・ラウリーの新しいアイデンティティとしての象徴性を評価していることが読み取れる。

居住者のコメントによると、若い人々にとって「ザ・ラウリーはソルフォードの象徴。卒業式で使った。」（20代女性）など、既に完成後10年経つ建物は人生の記憶にとけ込んでおり、また高齢者にとっては、「ザ・ラウリーのおかげでそれまでの人生の中で一度も見ることのなかったバレエを鑑賞できた」（60代女性）など、この文化施設により、舞台芸術等がより身近なものとなった変化が肯定的

に捉えられている。このことから、ザ・ラウリーは、既に地域住民の生活の一部となり、シンボリックな建物となっていると考えられる。

4-3 小括

象徴的建築の典型的な事例に絞り企画・設計プロセスを分析すると、施設の企画が先にあり、後から場所が選定されるものと、都市再生という目的が先行するものがあり、また設計段階においても、コンペによるデザイン、ヒアリングによる設計者選定と対話によるデザインと、多様なプロセスがみられた。これらの事例においては明確な経済効果が示されている一方、ザ・ラウリーにおいては、建物が地域住民のシンボルとなり、愛着が感じられている等、地域社会・文化に対する前向きな効果が読み取れた。

5. 象徴的建築の失敗からみる課題

5-1 失敗したプロジェクト

前章ではモデル的なプロジェクトに焦点を当て分析したが、本章では象徴的建築プロジェクトの課題を把握するために、失敗事例に焦点を当てる。明確に失敗と判断できる条件として、事業が財政的に破綻したもの（一度破綻して再生したものも含む）としたところ、前掲の45件のうち、ミレニアム・ドーム、アース・センター、ザ・パブリック、英国ポピュラー音楽センター（NCPM）、オーシャンの5件が抽出された（表6）。

5-2 失敗要因

これらのプロジェクトのうち、事業費が突出しており特殊性の高いミレニアム・ドームを除く4件に関する、政府関係機関の分析及び主要メディアの報道^{注31)}をもとに、失敗要因を抽出することにより、象徴的建築プロジェクトの課題について考察する。

① 宝くじ基金の仕組み

失敗の要因として指摘される点の一つは、宝くじ基金の仕組みそのものの欠陥にあるというものである。具体的には、1994年の宝くじ基金制度の開始に伴い、アーツ・カウンシル等の分配団体がその処理能力を超えた膨大な資金を手に入れたとの指摘である。当初はその資金を目当てに未熟な企画が多数舞い込み、アーツ・カウンシルも個別プロジェクトをフォローできない状況があった。失敗要因は「皮肉にも宝くじ基金の大成功にある」【B:00/08/23】とも言われている。

② 立地条件

二つ目の指摘は、地方都市でのプロジェクトが不利であるという、立地条件に関する点である。観光客の乏しい地方都市では来場者も少なく成功しづらいほか、そのリスクから投資家も敬遠しがちであるという指摘がなされている。実際、失敗事例はNCPMを除いて

表 6 失敗した象徴的建築プロジェクト

	ミレニアム・ドーム	アース・センター	ザ・パブリック	英国ポピュラー音楽センター	オーシャン
用途	博覧会場	テーマパーク	アートセンター	博物館	音楽ホール(ロンドン)
都市(立地)	ロンドン(8km圏外)	ドンカスター(8km圏外)	ウエストブロミッチ(8km圏外)	シェフィールド(2km圏内)	ロンドン(4～8km圏)
経緯等	ミレニアム委員会は、ミレニアムを祝福する大規模な博覧会(目的は壮大な娯楽、教育、国威発揚)を、2000年の1年間にわたり開催することとし、1996年に場所をグリンニッジ半島に決定。それから短期間で、長期ビジョン、各種イベント企画やインフラ整備計画も進めた。1997年に用地を取得し、同年6月には着工。2000年1月に開館したが、翌2月、入場者数が予想を大幅に下回り、収入の不振により代表者辞任。2000年途中には破産状態に陥る。イベント後しばらく買い手がいなかったが、2007年にO2ドームとしてリニューアル。	持続可能な開発や緑をテーマにした教育・観光のテーマパーク「アース・センター」構想が1980年代に立案され、1990年、ドンカスター近郊の約1.6平方キロの炭鉱(1980年代閉鎖)跡地に建設が決定。ミレニアム委員会の助成金を確保したものの民間セクターからの資金を得られず、約4,000万ポンドの予算不足で事業を開始。1999年に開館したが2000年6月に一時休館し、2001年5月に規模を縮小して再度開館。入場者数が伸び悩み、2004年9月に閉館。2005年10月にドンカスター市が支援を断念し、破産。	地元コミュニティアートグループの活動拠点として機能。当初民間団体が資金提供を受けて事業実施予定であったが、2006年に破綻し、サンドウェル区に譲渡され、サンドウェル・アーツ・トラストが運営を担った。2008年6月、2年遅れと予算超過で開館。同年9月に再び経営悪化で破産状態となる。2009年1月、アーツ・カウンシルが年間50万ポンドの補助を打ち切る決定をしたが、区は緊急の資金提供に合意し、同年6月、アーツ・カウンシルから300万ポンドの追加資金を確保し、8月に未完成だったギャラリーが完成。	1993年春にサウンド・シティ(1週間の音楽イベント)を開催したことがきっかけとなり、ロンドンやリバプールとの誘致合戦の末、誘致に成功。最新のテクノロジーを駆使した体験型博物館。1999年3月に開館したが、予想を下回る入場者数による料金収入の不足が深刻化。2000年5月に運営体制を一新し、展示内容の見直しや入場料の値下げ等の再生計画を立て、資金提供を受けたが、入場者の低迷は続き、同年6月、100万ポンドの負債を抱えて閉館。2003年、185万ポンドで地元の大学に売却され、現在は学生会館。	ロンドンの東部、貧困層の多く住むハックニーの中心部で、図書館等2つのランドマークとなる建物をコンバージョンした。落ちこぼれた学生や若年犯罪者に音楽教育プログラムを提供する「Rising Tide」プロジェクトの拠点としても機能。2001年3月に開館したが、2004年、ハックニー区は、オーシャンが自立的な経営の見込みがないと判断し、補助金を断ち切る決定を下した。2004年10月に破産。
建築家	Richard Rogers	Will Alsop, Bill Dunsterほか【コンベ】	Will Alsop	Nigel Coates【コンベ】	Woolf
設計の特徴	軽さ、経済性、工期短縮といった合理性を重視。12本のマストからケーブルにより屋根を吊ることで大空間を創出。	再生資源を用いて建設。講堂の屋根は電信柱で支えられ、内壁は炭鉱の解体時に出たコンクリートを使用する等。	豆の形をした窓をもつ、メタリックな質感のファサード。設計はコミュニティグループとの対話を重視して進められた。	ガラスのアトリウムの周りに、4つのステンレスのドラムが配置されている。ドラムの上部は風向きにあわせて回転する。	既存建物は保存建築物に指定されており、概観を保存したままコンバージョンを行った。
来訪者数	年間650万人 (当初予測は1200万人)	年間8万人(当初予測は50万人)	年間12万人	年間8万人(当初予測は40万人)	－

いずれも中心から4km圏外に立地しており、表3において8km圏外として分類した6件のうち、3件が失敗事例となることから、立地条件の悪さが失敗要因のひとつとなっている可能性は考えられる。

しかしこの点に関して、ミレニアム委員会は「リスクを避けるなら全てのプロジェクトはロンドンかエジンバラで行われることになるが、それでは他の地方都市を再生することができない」【G: 00/08/08】と反論している。

③ 事業計画の甘さ

三つ目の指摘は、企画が過度に複雑又は野心的である等、事業計画の甘さに関するものである。特に失敗に直結したのが、甘い入場者予測である。NCPMやアース・センターは、予測を遥かに下回る入場者数により経営破綻した。さらに、このような楽観的な推計の採択の背景に、「企画段階で意見聴取する有識者が特定の分野に偏っていた」【B: 04/02/13】ことや、「運営に関する専門家の不在」【N】²⁷⁾など、組織・体制面の課題も指摘されている。

④ 地域のニーズとの相違

四つ目として、地域のニーズに合わない施設内容が挙げられる。例えばアース・センターでは、「貧困層の多い地元住民は、持続可能な開発などに関心が薄い」【I: 04/09/15】、また、ザ・パブリックでは、「地元住民の求める施設は子どものためのスポーツ施設」【I: 09/01/29】と指摘されている。このような、地域の文脈・ニーズに合わない点が失敗の要因となると考えられる。

⑤ 曖昧なコンセプト

五つ目として、コンセプトの曖昧さの問題が挙げられている。例えば、アース・センターについては「施設の目的が何かについての射た説明ができず」【I: 00/08/08】、ザ・パブリックでは、「企画団体と建築家との間でコンセプトに対する認識の相違がある」【G: 06/06/25】、NCPMでは「曖昧な展示で来館者を混乱させる」【C】ことが指摘されている。

⑥ 魅力の乏しいコンテンツ

最後に、コンテンツの魅力に欠ける点である。例えば、NCPMでは展示物が乏しい点や、「デジタル技術を駆使した展示は評価できるが、一人当たりの所要時間がかかりすぎる」【I: 99/02/14】など、施設が展示空間にふさわしいものではないとの指摘がみられる。

5-3 小括

本研究において対象とした45件の象徴的建築プロジェクトのうち、5件が経営破綻等の失敗に陥った。その要因は大きく6点にまとめられたが、施設の運営・経営からコンセプトやコンテンツ等に至る企画部分の甘さが、大きな要因であることが伺える。また、立地やその土地のニーズに対する検討の欠如も指摘されている。その一方で、失敗したプロジェクトであっても、建築デザインそのものに対する批判は確認されなかった。

6. まとめ

本研究では、英国における文化先導型都市再生の中で、特にイングランドの象徴的建築に焦点を当て、その意義、現状(政策及びプロジェクトの特徴・効果)と、課題について分析を試みた。

通常の都市再開発が直接的に経済活性化を期待するものとするれば、象徴的建築による文化先導型都市再生は、投資や観光を呼ぶとともに、創造性の高い人々を引きつけることによる文化産業や創造産業の活性化により経済発展を期待するものであり、かつ、画一的な再開発とは異なる新たな象徴性の獲得により、地域社会の文化やアイデンティティの形成を担うという意義が認識されている。

英国政府はこのような認識の下、国家戦略として、都市再生における文化やデザインの重要性を掲げ、宝くじ基金を活用した財政支援等を実施した。ミレニアムを中心にイングランド各地に公共的な目的の象徴的建築が整備されてきたのは、国営宝くじ基金、特にミレニアム委員会の影響が大きい。象徴的建築の効果として、経済効

果が認められている一方、地域社会・文化に対する効果として、地元住民から親しまれアイデンティティの形成に寄与することが、ザ・ラウリーの事例から読み取れた。特に象徴性に対する居住者の高い評価は、象徴的建築による都市再生ならではの効果と捉えられる。

その一方で、経営破綻等により失敗した事例の分析から浮かび上がる課題は、象徴的建築による特有のもの（例えばデザインに対する支出の過多等が想定される）ではなく、むしろ一般的な事業と同様に、立地やニーズを踏まえた適切な事業計画やコンセプト・コンテンツの質等に留意することが重要であることが明らかになった。

低成長が続く中、都市の国際競争力強化が求められ、同時に心の豊かさを求める価値観が浸透する我が国においては、このような課題を踏まえたうえで、象徴的建築により都市の再生を図り、地域の創造的な社会環境を形成する考え方は有効であると考えられる。

注

- 注 1) 文献 1)p. 246, 文献 2)参照。衰退した工業都市スペイン・ビルバオを再生へと導いたグッゲンハイム美術館が、モデルとされている。
- 注 2) 例えば European Spatial Development Perspective (European Commission, 1999) において競争力強化がうたわれている。
- 注 3) 文献 3), 文献 4) 参照。
- 注 4) 文献 5)p. 833 参照。
- 注 5) 文献 1)p. 20 参照。
- 注 6) 文献 6)p. 890, 891, 文献 7)p. 917 参照。
- 注 7) 「都市再生基本方針（平成 14 年 7 月 19 日閣議決定）」参照。
- 注 8) 文献 14)p. 10 における Culture-led Regeneration の定義による。
- 注 9) 文献 7)p. 914 参照。
- 注 10) 文献 16), 文献 17) pp. 194-197 参照。
- 注 11) アーツ・カウンシルによれば、創造産業は 2007 年時点で英国の GVA のうち 599 億ポンド (6.2%) を占め、1997 年からの 10 年間で平均年 5% の成長を遂げた（同期間の英国全体の経済成長率は平均年 3%）。
- 注 12) 文献 5)p. 837 参照。文献 6), 文献 7)p. 916, 文献 17)p. 207 も同様。
- 注 13) 文献 18)p. 54 参照。
- 注 14) 文献 14)p. 8, 文献 7)p. 915 参照。
- 注 15) 文献 18)p. 54, 文献 19) 参照。
- 注 16) 文献 20) pp. 40-41 参照。
- 注 17) 文献 20)p. 18 参照。
- 注 18) 文献 6)p. 891, 文献 21)p. 9 参照。
- 注 19) 都市衰退の要因を突き止め、新たな都市のビジョンを確立することを目的として検討が進められた。
- 注 20) 文献 20)p. 7 参照。
- 注 21) ミレニアム委員会は 2006 年 11 月に解散した。
- 注 22) good causes は他に慈善事業, 健康, 教育, 環境, スポーツ, 遺産。50%は当選者に還元, 12%は国庫へ, 5%は販売店, 5%はくじの運営会社へ。
- 注 23) 文献 20)p. 7 参照。
- 注 24) 例えばミレニアム委員会は、ミレニアムを祝福し英国の将来にわたる遺産・モニュメントを創造することを掲げており、助成を受けた建築プロジェクトは、一定の象徴性を備えたものであることが推測される。
- 注 25) 都市圏の区分は、英国の国勢調査における区分による。
- 注 26) 都市圏の中心は、中心都市の市役所がある場所とした。
- 注 27) 文献 24), 文献 25) 参照。雇用創出効果も同じ。
- 注 28) 文献 26) 参照。ロンドンにある BBC の 5 部門を移転。職員約 2,500 名。
- 注 29) 代表例を 1 つ選ぶにあたり、大都市であるとプロジェクト以外の様々な要素が地域社会・文化に影響を与えると考え、象徴的建築による地域へのインパクトがより鮮明になると思われる、人口の最も少ないソルフォード（人口約 7 万 2 千人）のプロジェクトを対象とした。
- 注 30) 回答数は 26 であるが、本研究では、厳密な数値の算出や複雑な分析が目的ではなく、傾向を把握することを目的としており、その分析の範囲においては、一定の信頼性が確保され则认为。なお、「居住者」はグ

レーターマンチェスターに居住する者とし、それ以外を「来訪者」とする。

注 31) 政府関係機関として National Audit Office（文中「N」と略す。）の出版物と CABB の Web サイト（同「C」）。<http://www.cabe.org.uk>）、主要メディアとして BBC（同「B」）、The Independent（同「I」）、The Guardian（同「G」）の記事を分析した。抽出された、プロジェクトの失敗要因について触れた記事等は、合計 33 件。

参考文献

- 1) Tallon, A.: *Urban Regeneration in the UK*, Routledge, 2010.
- 2) The Guardian: *A return to Victorian values*, 9 January 2000.
- 3) Florida, R.: *The Rise of the Creative Class and How It's Transforming Work, Leisure, Community and Everyday Life*, Basic Books, 2002.
- 4) Landry, C.: *The Creative City: A Toolkit for Urban Innovators*, Earthscan, 2000.
- 5) Miles, S. and Paddison, R.: Introduction: The Rise and Rise of Culture-led Urban Regeneration, *Urban Studies*, 42 (5) pp.833-839, 2005.
- 6) Miles, M.: Interruptions: Testing the Rhetoric of Culturally Led Urban Development, *Urban Studies* 42 (5) pp.889-911, 2005.
- 7) Miles, S.: 'Our Tyne': Iconic Regeneration and the Revitalisation of Identity in NewcastleGateshead, *Urban Studies* 42 (5) pp.913-926, 2005.
- 8) 西山康雄ほか: イギリスのガバナンス型まちづくり, 学芸出版社, 2008
- 9) 小篠隆生: 都市・地域と大学の連携による都心再生のための空間計画づくりの取り組み, 日本都市計画学会都市計画論文集 No.43 pp.391-396, 2008
- 10) 大橋竜太: 英国の建築保存と都市再生, 鹿島出版会, 2007
- 11) 宮川智子ほか: イギリス・マンチェスター東部における都市再生と連携した環境再生に関する研究, 日本建築学会計画系論文集 第 573 号 pp.85-91, 2003.11
- 12) 村木美貴: 都市再生のための計画と事業の関連性に関する研究, 日本都市計画学会都市計画論文集 No.39 pp.439-444, 2004
- 13) 安齊真吾: 英国の都市再生施策 New Deal for Communities における全体論的アプローチに関する研究, 日本都市計画学会都市計画論文集 No.45 pp.49-54, 2010
- 14) Evans, G.: Measure for Measure: Evaluating the Evidence of Culture's Contribution to Regeneration, *Urban Studies*, 42 (5) pp.1-25, 2005.
- 15) Hall, P.: *Cities in Civilization*, Weidenfeld & Nicolson, 1998.
- 16) Zukin, S.: *The Cultures of Cities*, Blackwell, 1995.
- 17) デイヴィッド・スロスビー: 文化経済学入門 - 創造性の探求から都市再生まで -, 日本経済新聞出版社, 2002
- 18) Butler, T. and Hamnett, C.: Regenerating a global city, in Imrie, R. et al (eds.) *Regenerating London* (pp.40-57), Routledge, 2009.
- 19) Smyth, H.: *Marketing the City: The Role of Flagship Developments in Urban Regeneration*, E & FN Spon, 1994.
- 20) Department for Culture, Media and Sport (DCMS): *Culture at the Heart of Regeneration*, DCMS, 2004.
- 21) 山崎茂雄: 文化による都市再生学, アスカ文化出版, 2009
- 22) Urban Task Force: *Towards an Urban Renaissance: Report of the Urban Task Force*, Office of the Deputy Prime Minister, 1999.
- 23) Wilks-Heeg, S. and North, P.: Cultural Policy and Urban Regeneration: a Special Edition of Local Economy, *Local Economy*, 19 (3), pp.305-311, 2004.
- 24) Tate: *Tate Modern: The First Five Years*, Tate, 2005.
- 25) Gateshead Council: *Passionate about Gateshead Quays: The Transformation*, 2006.
- 26) CABB: *The Lowry*, available from <http://webarchive.nationalarchives.gov.uk/20110118095356/http://www.cabe.org.uk/case-studies/the-lowry> [2011/5/5 アクセス]
- 27) NAO: *The Millennium Dome*, NAO, 2000.

(2011年5月7日原稿受理, 2011年11月7日採用決定)